

更生保護 ひろしま

号外

第75回

広島県推進委員会



“社会を明るくする運動”
シンボルマーク

社会を明るくする運動

Time
with Hope

がんばれるのは、どんなときだろう。
踏ん張れるのは、どんなときだろう。

自分を認めてくれるひとと、
肩をたたく手の温かさ。
遠くから見守るそのまなざし。

待っている人の存在に気づいたとき、
立ち直れると信じられる。

たとえ時間がかかっても。

進む、希望とともに。

主唱 / 法務省
MINISTRY OF JUSTICE

犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ

第75回 社会を明るくする運動

「社会を明るくする運動」は、犯罪や非行から立ち直ろうとする人たちを支え、
新たな被害者も加害者も生まない安全・安心な地域社会を目指す国民運動です。

社明 しやめい

検索



作文・標語コンテスト 入賞作品集

“社会を明るくする運動”
作文コンテスト入賞作品

小学生の部



“社会を明るくする運動”
広島県推進委員会委員長(広島県知事)賞

「知ることから始めよう」

広島県・福山市立伊勢丘小学校・5年

秦 美織

私の家には、兄のしゅみであるルービックキューブが必ず全面そろった状態でテレビ台の上に置いてあります。昨日は、オレンジ色が正面を向いて置かれており、今日は、緑色が正面を向いて置かれていました。ただ正面からながめているだけでは、全ての色を見ることはできません。実際に手に取って、色々な角度から見ることで初めて全ての色を見ることができます。

犯罪や非行と聞いて私は「こわいな」「関わりたくない」「自分には関係ない」と、正直思いました。でもルービックキューブと一緒に、色々な角度から犯罪や非行について知ること、今まで知らなかったことに気づくことができるかもしれないと思いました。そこで、少しでも犯罪や非行について知るために私は、二つのことをしました。

一つ目は、まなびの館ローズコムで行われた、第七五回社会を明るくする運動の作品展に、母と二人で行きました。この作品展に行くまでは、少年院や少女苑という言葉すら私は知りませんでした。作品展に行くまでの道中、母から少年院などのことを聞き、いざ作品展へ。作品展には、俳句や短歌、詩、他にも絵や書道が展示されていました。書道は、力強く生き生きとした字で書かれており、絵は、たくさん色が使われていて、きれいでした。一方で俳句や詩には、家族に対する思いや、後悔の思いがこめられたものもありました。私が作品の中で一番印象に残ったのは『やりました』という詩です。最初は涙目のお母さんやけいさつ官の前で、「やりました」と罪を認めていた作者。だけど、最後には「この一年、しっかりやり切れましたか」と少年院の職員に聞かれ「やりました」と自信を持って言う作者。同じ「やりました」でも、全く意味や作者の気持ちがちがっていて前向きな気持ちが伝わってきました。犯罪や非行を起こす人は、「悪い人」「こわい人」と決めつけていました。しかし、力

強く明るい作品そして、前向きな作品にふれたことで罪を償い、新しい一步をふみ出そうとしている姿を応えんしたくなりました。

二つ目は、大沼えりこさんの『絲 君の笑顔に会いたくて』という本を読みました。罪を犯した人たちの再出発を支える「保護司」の活動を描いたお話です。この本で一番おどろいたことは、更生の努力をしたとしてもその少年たちはなかなか社会にもどることができないことです。一生懸命更生しても、就職先が見つからなかったり、帰る家がないということを知って私はむねが痛くなりました。私はこの本を読んで、罪を償い再出発をしようとしている人たちを支えるために、たくさんの人の理解や協力が必要だと知りました。そして、私もその理解者の一人にならなければいけないと思いました。

今回、私は作品展や大沼さんの本を通して犯罪や非行を起こした人たちの思いと、更生や再出発を支えるために力をつくしている人たちのことを知ることができました。でも、それはほんの一部だけで、まだまだ知らないことがたくさんあると思います。だから、ルービックキューブを手に取り、全ての色を見るように、これからも「社会を明るくする運動」についての取り組みを色々な方面から、知っていきたいと思います。



広島保護観察所長賞

「寄り添える仲間」

広島県・広島市立五日市東小学校・6年

横畑 莉子

私は、この作文を書くときに「非行」という言葉を知らなかったのも、まずは調べてみました。意味は「二十歳未満の青少年が、法律や社会のルールに違反する行為や、社会的に好ましくないとされる行為」を示すそうです。画像も見てみると飲酒や、喫煙、万引きなどの画像が出てきました。その中でも、私が気になったのは「ケーキの切れない非行少年たち」というタイトルと、私が思いつかないような切り方をした、ケーキの画像がありました。なぜこのような切り方になったのだろう。とても不思議に思いました。私の知っている切り方は、円の中心から外側に切る方法です。どうしてこうも違うのでしょうか。調べてみました。調べてみると「彼らが過去に適切な支援を受けられなかったことと、関係している可能性があります。」という文章を見つけました。支

援とはなんでしょう。どこで受けられるのでしょうか。

私はケーキの切り方や、包丁の使い方、お皿の洗い方など、ほぼ全てのことを家で母に教わっています。学校生活でのことは、先生や友達に教わっています。それが当たり前だと思っていました。でも、もしそれら全ての教わる相手が居なかったら、私もケーキの切り方が分からなかったかもしれません。みんなが当たり前に行えることができなかったかもしれません。何もできない大人になってしまうかもしれません。想像してみると、とても辛くてさみしいです。そう考えると、教わること、叱ってもらうことはとても大切なことだと感じます。私は、それが適切な支援だと思います。適切な支援を受けられていないと、やっていいこととやってはいけないことの区別がつかないのだと思います。教えてくれる、相談できる、相手がいるのは幸せなことだと思います。私には、やってはいけないこと以上に、楽しいやっていいことが、たくさんあります。みんなもそうだと、青少年の非行が少なくなるのではないのでしょうか。

「私が非行の道に行ったらどうする?。」

と、母に聞いてみました。

「すごく悲しい。けど、一緒について行こうかな。」

と、言いました。私は、

「なんでついてくるの?。」

と、聞くと

「だってなんかすごい辛くて、非行の道に進むんだとしたらその気持ちが知りたいから。りがピンクの髪でバイクに乗るんなら、お母さんも付き合うよ。」

と、言いました。母の答えに私は笑ってしまっただけで、すごく嬉しかったです。同時に母はいつでも私の味方でいてくれる気がして、あったかい気持ちになりました。

来年中学生になって、新しい友達も増えます。今、私が感じているような、嬉しくてあったかい気持ちを忘れずに、楽しくやってもいいことを沢山増やしていけるように、周りの人達も寄り添える仲間になりたいです。



広島県保護司会連合会会長賞

「はじめの一歩」

広島県・東広島市立西条小学校・6年

うじま そうた
氏間 創太

僕の祖父母は、瀬戸内海の小さな離島に住んでいる。高齢化率がとても高く、六十五歳以上の住民が、全体の約六十五%を占めている。祖父母の家の近所にも、八十

代、九十代の方が何人も住んでおられる。島にある病院は一つで、救急車はない。

僕が祖父母の家に帰省すると、玄関に担架が立てかけてあった。僕と母は驚いて、

「これ、どうしたの?」

と祖父に尋ねた。すると祖父は、

「作ったんよ。」

と答えた。僕と母は状況が全くつかめず、

「なんで?」

と問い返した。すると祖父は、

「この前、隣のおじいさんが倒れたから、病院に運ぼうとしたんだけど、重くて大人四人がかりでも運べなかったんよ。それで、『担架があったらよかった』って思ったから、ばあちゃんと協力して作ったんよ。」

と教えてくれた。そして祖母は、

「これでまた同じようなことが起きても、病院に運べるから大丈夫。」

と笑顔で言った。

僕は、近所のお年寄りのためにここまでする祖父母を、カッコいいと思った。そして、さりげなく人助けをする姿に、とても感動した。

祖父母にとったら、自分たちより体が不自由で生活に困っている人を大切に、助けることは当たり前のことらしい。例えば、祖母は、近所のおばあさんにおかずのおすそ分けをしたり、民生委員として、一人暮らしの方の様子を見回ったりすることが日常である。僕は祖父母のこのような行動によって、社会は明るくなっていると思う。

さあ、僕はどうか。自分より困っている人がいることに、まず、気付いているのだろうか。朝、登校班の集合場所に困っている下級生はいないか。学校で、クラスメイトの中に困っている人はいないか。放課後、学童で困っている人はいないか。今はまだ、あまり気付いていないかもしれない。

そして、それに気付いたとしても、行動に移せるだろうか。その時、恥ずかしがらず、勇気を出すことができるだろうか。

僕は、人と接するとき、控えめなところがある。人にどう思われるか少し不安になったりする。失敗することが少し怖い。けれど、このような性格は、見方を変えれば、人を思いやることができるということかもしれない。だから、僕なりのやり方で、困っている人に、声をかけることから始めてみたい。思い返せば、これまで僕もクラスの友達から、

「大丈夫?どうしたの?」

「一緒に〇〇しよう!」

と声をかけられたことがあった。その時の嬉しさや、安心感を思い出すと、困ったときの声掛けにはとても力があると思う。それを信じて、はじめの一步を踏み出したい。いずれは、大人になって、祖父母のように、さりげなく人助けができれば、社会を明るくすることができるのではないかな。



広島県更生保護協会理事長賞

「心をつなぐ「あいさつ」の力」

広島県・三原市立久井小学校・6年

どい
土居 蓮琉
はる

ぼくは毎朝、家の近くのバス停からスクールバスに乗って学校に通っています。バス停には、毎日ボランティアのおばあさんが立っていて、登校する子どもたちに笑顔で声をかけてくれます。

ある朝、ぼくは少しねむくて、ぼんやりした顔でバス停に向かいました。すると、そのおばあさんが「おはよう!」と明るく声をかけてくれました。その一言がとてもあたたかくて、心が軽くなったのを覚えています。うれしくなったぼくは、小さな声でしたが「おはようございます」と返しました。すると、おばあさんはにこっと笑ってくれました。

その日から、ぼくは自分からあいさつをするようになりました。家の人、友達、先生、そして知らない人にも、できるだけはっきりとした声であいさつをするように心がけています。不思議なことに、あいさつをするたびに相手の顔が明るくなり、ぼく自身も元気な気持ちになります。

あいさつには人の心をつなぐ力があるのだと気づきました。言葉は目に見えないけれど、相手に安心感や信らいを届けることができるのだと思います。

朝のバス停でのおばあさんとのやり取りも、ぼくにとって大切な思い出です。あのときおばあさんが声をかけてくれなかったら、ぼくは今のようにあいさつの大切さに気づけなかったかもしれません。たった一言でも、だれかの一日を明るく変えることができる。そんな言葉の力をぼくは信じています。

ニュースでは、いじめやこどく、犯罪など、心が痛む話をよく耳にします。そんなときぼくは、「もし、だれかがその人にやさしい言葉をかけていたら、何か変わっていたのではないかな」と思います。人を思いやる気持ちは、小さな行動から始まると思います。あいさつはその中でも、とても簡単で、けれどとても大きな意味を持つ行動のひとつだと思います。

す。

「社会を明るくする運動」は、みんなが安心してらせる明るい社会をつくるための取り組みです。ぼくたち小学生でもできることは、きっとたくさんあります。毎日あいさつをすること、人の気持ちを考えること、困っている人を見かけたら声をかけること。そんなひとつひとつの行動が、社会を変える力になるとぼくは思っています。

これからもぼくは、自分から元氣にあいさつをし続けたいです。そして、友達や先生だけでなく、地域の人たちや初めて会う人にも、笑顔であいさつができるような人になりたいです。あいさつをきっかけに生まれるつながりが、広がっていくことで、もっとやさしい社会になるのではないかなと思います。

小さなあいさつから始まる、大きなやさしさ。そんな未来を、ぼくもつくっていきたいです。そして、みんなが笑顔で明るい社会を実現できるように心がけていきたいと思いました。

最近、SNSなどで友達との直接的な関わりが少なくなってきているのであいさつのあたたかさが分からなくなってきたあまり積極的にあいさつをしなくなってきました。なので積極的に人に会ってあいさつをしていきたいです。



広島県更生保護女性連盟会長賞

「まずは小さなことから」

広島県・広島市立中山小学校・6年

ひきたに
引谷 悠久
はるひさ

ぼくの通う中山小学校は、「自分と人と物を大切にします」というスローガンをかけています。ぼくは初めその言葉の意味がはっきりとはわかりませんでした。ですが、この言葉の人や物などを大切にすることというのは、家でも保育園でも言われてきたことだったので、理解していました。でも、自分を大切にすることというのは、あまり理解ができず、考えてみました。

自分のことが大切に思えない、自分のことが嫌いだとどうなるでしょうか。何か小さな失敗をただけで、自分はダメな人間で、価値がない人間なんだと思ってしまうかもしれません。そういう気持ちになってしまうと、失敗がこわくて挑戦ができなくなるかもしれません。そうになってしまうと、毎日が楽しめないで、毎日がどうでもよくなってしまうと思います。そんな状態では他の人に思いやりをもって接することなどとうて

い無理だと思います。

多くの小学校では「ヒーロータイム」というものがあります。これは、毎日帰りの会で友達のいいな、すごいなと思うところ思うところを紙に書いて発表し書いた友達にその紙を渡します。

「そうじをがんばっていてすごい。」

「昼休けいに転んだ友達を連れていってあげていてやさしいなと思った。」

「授業中に、たくさん発表をしてがんばっていた。」
などです。ヒーローとしてよいところと言われると自分のいろんなところ見てくれているんだなととてもうれしくなります。この取り組みは他の人の良いところを探すだけではなく、自分のことを好きになるためには、とても良い事だと思います。

犯罪を犯してしまう人の中には、自分のことを大切に思えず、未来がどうでもよくなってしまい物を盗んだり、人を傷つけたりしてしまった人もいます。そして罪を償った後も、自分を大切に思えず、新しく頑張ることが難しくなって、また犯罪を犯してしまう人も少なくはないと思います。自分を大切に、自分を好きな人が増えるということは、犯罪が少ない社会につながるだけでなく、何かの事情で犯罪を犯してしまった人が、罪を償った後にまたいろんなことにどんどんチャレンジして前進するためにも大切だと思います。

明るい社会とは、みんなが笑顔で楽しく安心して暮らせる社会だと思っています。そのような社会を作るためには、他の人を大切にする思いやりの心を持つことと同じくらい、自分を大切にしていけることが、大切だと思います。みんなが自分の価値や、良さに気付けるように、ヒーロータイムなどを通してこれからもいろんな人のいろんな良いところを見つけてそれを心の中で思うだけでなく、しっかり良いところがあるのだということを伝えていけるようになりたいと思います。



広島県BBS連盟会長賞

「プラスの言葉は魔法の言葉」

広島県・広島市立五日市南小学校・6年

坂井 日向子

私は、犯罪や非行を起こさない、起こさせないために、プラスな言葉であふれるまちを地域の人全員で目指したいと思いました。

私は昔、友達に

「どうして犯罪者の人達は犯罪なんかするんだろうね。」と話したことがあります。その時、友達は

「きっと、支えてくれる人がいなかったからじゃない？一人ぼっちじゃ、ぽっと悪い心が芽生えちゃってもそれを止めてくれる人はいないでしょ？」

と答えてくれました。その時はそうだね、たしかにねと返したのですが後から考えてハッとしました。一人じゃ、悪い考えが生まれてしまっっては止めることができないのなら、まわりの人同士で支え合えるようになればいいのでは？という考えが浮かんできたのです。私は、小さいころに、

「あんたはありがとう、ごめんなさい、おはよう、楽しかったというプラスの言葉を色んな人にすんなり言えてすごいね。こっちまで嬉しい気持ちになるよ。」

と家族に言われたことがあります。その時私は「プラスの言葉をちゃんとと言える」ってすごくいいことなんだなと思い、今まで以上にありがとう、ごめんなさい、おはよう、楽しかったなどの言葉をちゃんと言うよう心がけました。すると、自然に口げんかや物の取り争いが減っていることに気がついたのです。これは、プラスの言葉をかけられるよう努力した私のがんばりの結果とも言えるし、他の人が私のがんばりを面と向かってほめてくれたおかげだとも思いました。

じゃあ、これと同じことをまちや地域でやってみればいいのかと私は考えたのです。してはいけないことをする、他の人に暴力を加える一犯罪をしてしまった人は、きっと色んな理由があってそんなことをしてしまいます。なら、その人ががんばっていること、いいところなどプラスなところをまわりの人が見つけてあげて、それを直接伝えることができればその人の心のもやもやも少しは軽くなるのではないのでしょうか。私も昔、友達とケンカをしてしまった時に、お母さんが

「まっすぐなところがあんたのいいところだよ。」

と言ってくれて心のもやもやが晴れたことがあります。心に悪をかかえ、それを犯罪として実行してしまう人は犯罪者になってしまいます。その人の心の悪を、プラスな言葉で少しでもなくすことができたなら、まちはもっと笑顔と幸せであふれるのになと思います。もちろん、そう簡単には人の心の悪ははらうことはできません。友達が言っていたように、一人で自分の悪い心を正し、自覚することも難しいでしょう。だからこそ、一人ではなく大勢で協力するのです。誰かの言葉で元気づけられた人が他の悩んでいる人にプラスの言葉をかけてあげて、またその人が他の人に・・・と、どんどんつないでいくのです。これは、永遠にとぎれることのない形

のないキャッチボールのようなものです。キャッチボールは一人では成立しません。誰かとやり、はじめて成立するものです。言葉をなげかけるのも同じです。はげまされた人がまた他の人をはげますということをずうっと続けていくことができれば、私達のまちから犯罪や非行が減っていくと私は思うのです。

ありがとう、ごめんなさい、おはよう、楽しかった・・・そんな、人を喜ばせられる、元気にしてあげられる、はげますことのできるプラスの言葉は「魔法の言葉」です。ささやかなところからはじめどんどんつないでいく。犯罪や非行がないまちにするためには、私達が「プラスの言葉」をどこまでもどこまでもあふれさせればいいと思います。以上のことから、私は「プラスの言葉」であふれるまちを皆で目指したらいいと考えました。

特別賞

サンフレッチェ広島賞

「暴力のない明るい社会にするためには」

広島県・東広島市立八本松小学校・6年
きむら あさき

木村 旭希

社会を明るくするためにぼくは、自分の周りから暴力を無くしていこうと決意しました。なぜなら、暴力はした人も含めてだれも幸せな気持ちにならないからです。

ぼくは、家で弟と毎日のようにケンカをします。そして、大体最後はぼくが弟に暴力をふるい、親に怒られることが多いです。その時ぼくは、親に怒られて、悲しい気持ちになります。弟は、ぼくの暴力で悲しい思いをして泣いていますし、親は、ぼくを怒った後いつも悲しい表情をしています。つまり、暴力は、受けた人はもちろん、暴力をふるった人も、さらには周囲にいる人まで悲しい思いにさせ、だれ一人幸せな気持ちにはならないのです。

暴力をふるったとき親から、

「怒る気持ちがすべて悪いことではない。暴力をふるうという手段が間違っている。暴力以外の表現が必ずある。」とさとされます。そのたびに、なぜ暴力をふるってしまうのだろうと落ちこんでいます。この作文を書くに当たって、なぜ自分は、暴力という手段を選んでしまうのか、とことん考えてみることにしました。

まず、心に浮かんだことは次のことです。ぼくが、暴力をふるって怒られた時にいつも真っ先に心にうかぶのは、弟だって僕が腹を立てるようなことを言うてるのに、なぜぼくばかりが怒られるのだろうということです。この思いには、弟

だって暴力をふるわれるようなことをしているのだから、ぼくが暴力をふるうのは、しかたがないという思いが含まれています。つまり、暴力を正当化してしまう気持ちがあるということに気がきました。ところが、社会に出ると腹が立ったからといって、暴力をふるってしまえば、つかまってしまいます。それぐらい重いこととして、社会では見られています。だれも幸せな気持ちにできない暴力は、正当化されるべきではないと感じました。

次に、なぜ暴力という手段を選たくしてしまうようになったのか考えてみました。知らず知らずのうちに、腹が立ったことの解決手段として暴力をふるうという価値観を身に付けてしまっています。その価値観は、ぼくの身の回りにあふれているのではないかと考えました。例えば、マンガやアニメに出てくるヒーローは、悪いことをしているからといって、悪役に当たる登場人物を暴力でこらしめるストーリーであふれています。親もしつけのためという理由で子どもに暴力をふるうこともあるかもしれません。仮に、親が努力して家庭から暴力を極力減らしたとしても、暴力をふるうという行動はそこら中にあふれているということに気がきました。

そこで、これらの気付きから、ぼくが実際どのように行動や考えを変えていけばいいか考えました。

まず一つ目は、暴力を正当化することをやめることです。そして、暴力以外の表現を選択することです。怒るという感情を無くすことは難しいと思います。親からも大人に近づくにつれて、理不尽な思いをする機会が増えると聞きました。暴力を正当化するくせが直らなければ、自分を含め周りの人を不幸にする大人になってしまいます。

二つ目に、目にする情報には暴力を正当化するような価値観がたくさん含まれているということを常に意識することです。そのような価値観を無くすことは難しいと思いますが、意識し続けることはできると思います。

このように、行動や意識を変えることで、少なくともぼくの周りからは、暴力で悲しむ人は減っていくはずです。この考えが少しずつ広がって明るい社会に向かっていけばいいと思います。

特別賞

サンフレッチェ広島レジーナ賞

「たった一言で」

広島県・広島市立竹屋小学校・6年
わたなべ そうすけ

渡邊 蒼介

テレビをつけてニュースを見ると、毎日といっていいほど

犯罪のニュースが放送されていて、その中でも未成年が非行に走り、捕まるというニュースが目に入ります。僕は、どうしてそんなことをやってしまったのか、不思議に思います。インターネットで調べてみると、理由は一つではなく、学校での悩み、友達関係、家庭環境、社会環境などのさまざまな理由があることが分かりました。人が罪を犯してしまうのは、身の周りの環境がよくなかったりして、自分の苦しみや怒りにかわって自分のいらいらや怒りがおさえられなくなるからだと思います。

非行を防ぐためには罪を犯す前に周りの人に悩みを相談することです。しかし現実はどうでもありません。だれにも悩みを相談できず、社会から孤立し、罪を犯してしまう人がこの世の中にいるのです。この理想と現実のギャップをうめるために僕ができることを考えました。

まず、家族や友人をよく知ることです。なぜならば、よく知ることによってその人達の変化に気づけるからです。たとえば、家族や友人の食欲がなかったり、好きな事をしているのに表情が暗かったときにいつもの様子を知っていることで「どうしたの」と声をかけることができます。それがきっかけで、その人の心配事を聞き出せます。その内容が僕にはどうすることもできない事だったら周りの大人（親、先生、地域の人達）に相談することができます。そうする事で救われる人がいるはずです。そしてこの関係性を一人一人がきずくことができたなら、社会から孤立して非行に走る人を減らすことができます。

では、どうやってこの関係性を一人一人がきずくことができるのでしょうか。

まず身近にできることは、あいさつです。元気にあいさつをしているか、あいさつを返さないか、その表情や様子を見ることができます。「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」この三つの言葉で今の自分の状態を知ってもらえるし、相手のことも知ることができます。少しでも身の周りの人にあいさつをすることでコミュニケーションをとり、何か困っていることを相談できる人を増やすことが大切だと思います。

また、人に助けてもらったなら、「ありがとう」と言葉にして相手に伝えることも必要です。素直に「ありがとう」と伝えることで、周りの人もうれしい気持ちになり、また支えてあげようと思うと思います。

それから、友達とけんかをしてしまった時にちゃんと相手の話を聞いて自分のことを振り返り、よくなかったことを「ごめんね」とあやまることができればおたがいにいやな気持ちになりません。

ぼくにはいつも心がけていることがあります。久しぶりに登校した友達に、いつも通り「おはよう」とあいさつをしたり、ゲームの話をします。落ち着かないようすだったら、さりげなく手伝います。これからも、周りの人達の様子がおかしいなと思ったら、いつでも、「だいじょうぶ?」と声をかけられる人になりたいです。こんな風にみんなが意識して生活すれば、非行に走ってしまう悲しい人達がすくわれて、少しでもへっていくと思います。そんな世の中になってほしいと思います。

“社会を明るくする運動”
作文コンテスト入賞作品

中学生の部

優秀賞

“社会を明るくする運動”
広島県推進委員会委員長(広島県知事)賞

「やり直す勇気を支える社会へ」

広島県・広島市立幟町中学校・3年

李 瑛慈^{えいなり}

「社会を明るくする運動」は、犯罪や非行をした人たちの立ち直りを、社会全体で支えていこうという取り組みです。この言葉に初めて出会ったとき、私は「それは特別な人のための活動」だと思っていました。でも今では、この運動は私たち一人ひとりに関わることでできる、大切な社会のあり方を考えるチャンスなのだと感じています。

私がそう思ったのは、小学校六年生のときのある出来事がきっかけでした。同じクラスの男子が、学校で問題を起こし、先生にきつく注意されたことがありました。それまで彼はよく大きな声を出したり、周りの人に当たったりすることがあり、私は「ちょっと怖い人」と距離を置いていました。でもその日、先生に叱られたあと、彼はぽつりと「家では誰も話を聞いてくれない」とつぶやいたのを聞いたとき、私は言葉を失いました。

これまで彼のことを「問題を起こす人」としか見ていなかった自分が恥ずかしくなりました。誰にも相談できず、苦しい思いを抱えたまま学校に来ていたのかもしれない。その気持ちを、私は想像することさえしていなかったのです。

犯罪や非行の背景には、家庭や人間関係、経済的な問題など、私たちに見えない理由が隠れていることがありま

す。ただ「悪いことをした」とだけ見てしまうと、その人の苦しみや、やり直したいという気持ちを見落としてしまうのではないかと思います。

立ち直るというのは、一人でできることではないと思います。過ちに気づいた人が「変わりたい」と思ったとき、その気持ちを受け止め、信じてくれる誰かがそばにいるかどうか。それが、その人の未来を大きく左右するのではないのでしょうか。

私たちにも、できることがあります。例えば、学校で困っている人に声をかける。ひとりぼっちの人に「一緒に行こう」と誘う。何か間違えた人に「次はうまくいくよ」と声をかける。

そんな一つひとつの行動が、もしかしたら誰かの心を支え、「やり直せるかもしれない」と思える力になるかもしれません。

「社会を明るくする」とは、過去を責めるのではなく、未来を信じることだと私は思います。そしてその未来は、私たちの小さな思いやりや行動の積み重ねから生まれるのだと思います。誰もが安心してやり直せる社会をつくることは、特別な人だけがつくるのではなく、私たち一人ひとりの思いやりです。

今の社会では、他人にあまり干渉しないのがスマートだと言われることもあります。でも、本当に人を支えるのは、小さな声かけや、そっと寄り添う気持ちだと思います。

私たちは、他人の失敗を見たとき、すぐに批判したくなることがあります。「なんでそんなことをしたの?」「最低だ」と言いたくなる気持ちも分かります。でも、過ちを犯してしまった人が、心の中でどれほど苦しんでいるかは、外から見えないこともあります。その人が「やり直したい」と思ったとき、もし誰にも信じてもらえなかったら、その人はどこへ行けばいいのでしょうか。言葉はとても重たいものです。一言が立ち直るきっかけになるかもしれません。

私もこれから、誰かの失敗を笑ったり、見下したりするのではなく、「もう一度がんばろう」と思えるような言葉をかけられる人でいたいと思います。そういうやさしさのある空気を広げることが大事だと思います。もっとそれを意識していきたいと思います。

やさしさには、人を変える力があります。立ち直る勇気を持った人を、そっと支えられるような社会を、私はこれから作っていきたいです。まずは自分自身の行動から、相手の立場を想像し、言葉を選ぶこと。そして、分かち合えること。

誰もが「ここでやり直せる」と思える社会は、きっと明るく、あたたかいはずです。立ち直ることは恥ではなく、勇気です。



"広島保護観察所長賞
日本更生保護女性連盟理事長賞"

「立ち直り、その未来のために」

広島県・福山市立加茂中学校・2年

^{ふじま} 藤間 ^{しほ} 志帆

「教誨師」をご存じだろうか?教誨師とは、刑務所で受刑者に教を説いたり、対話をする宗教者のことだ。現在、日本では千八百人の教誨師が活動している。教誨師は、自身の宗教、宗派の教義に基づき、受刑者の人格形成に関わる話をして、犯罪からの立ち直りを手助けする。

私が教誨師の存在を知ったのは、この夏のことだ。「社会を明るくする運動」の作文を書くため、犯罪や非行からの立ち直りについて考えてみたが、私の経験では全く何も浮かんでこないの、両親に相談した。すると、両親は私の祖父が約四十年間教誨師として、受刑者と関わっていることを教えてくれた。私は、犯罪を犯してしまった人たちの立ち直りを支えている教誨師の祖父の話聞くことで、社会を明るくするため私にもできることがわかるのではないかと思った。そこで、祖父にインタビューをして、自分自身にできることを考えてみることにした。

祖父は、刑務所や受刑者について、また教誨師の立場、その役割、そして祖父自身の経験などを語ってくれた。祖父は、浄土真宗の僧侶という立場で、教誨師として刑務所に出向き、活動をしている。刑務所は、受刑者が社会復帰するための場所である。そこで、祖父は受刑者の方々に犯罪を犯してしまった人生から立ち直るヒントを届けるという意識で話をするそうだ。具体的には、人間が生きていくとはどういうことか、苦しいことがあっても人に迷惑をかけたり、再犯を犯さないようにということを伝えているという。仏教の言葉で、「人生は苦なり。」という言葉があると、祖父は私にも教えてくれた。「人生は思い通りにならないことばかりである。」という意味だそうだ。こういったことを、教誨師として、受刑者の方々に話していると教えてくれた。祖父が語ってくれた中で、最も心に残ったことがある。それは、「犯罪を犯した人が立ち直るために、私たちにできることは何か?」と私が尋ねた時の祖父の言葉だ。祖父は、何の迷いもなく、「今まで通りに普通に付き合っていく方がいい。」と語ってくれた。その祖父の姿に、私は深くうなづくことができた。

祖父母が渡してくれた刑務所の新聞を読んで、私が考えさせられた内容を紹介する。「こんな私を、妻はこどもたちと待ってくれるのか。最後まで待ってもらえるのか、分から

ない。私が出所した後、友達とは普段どおりの付き合いができるのかどうか。」「出所後は、自分が考えているよりも世間から冷たい目で見られ、思うようにいなくて大変なこともあると思う。」という内容だ。この記事を読み、私は受刑者の方々が社会復帰をするにあたって、家族や友達、また社会の人たちに受け入れられるのか、そのことを大変不安に思っていることを知って、何とも言い難い気持ちになってしまった。そして、私は、「もしも自分の家の隣に刑務所を出所してきた人が住むことになったとしたら?」と想像してみた。私だったら、まず「え!そんな人が引っ越してくるなんて!」と驚いてしまうだろう。そして、「どんな罪で逮捕された人なの?」「もし、危害を加えられたら?」と恐怖を感じるかもしれない。ついには、「自分が引っ越してしまった方が安全じゃないか。」とまで考えてしまうだろう。

しかし一方では、祖父の迷わない「普通に付き合う。」という一言が心に浮かんできたのだ。こういう私たちの出所した人たちに感じてしまう、驚きや恐怖といった特別視、その目が出所者の心を傷つけ、犯罪や非行からの立ち直りの邪魔をしているのだという事実気づき、はっとさせられた。もし、私が出所者の立場だったならば、自分の存在自体を否定されたのだと思い、マイナスの考えになってしまうだろう。仕事も人間関係も諦めて、再犯を犯してしまいそうな気がする。そうすると、負の連鎖の繰り返しだ。これは、特別視されてしまったから起こってしまうことではないだろうか。

現在、日本で約六、七万人が刑務所に収容されている。罪の重さはそれぞれであり、その立ち直りは決して簡単な話ではないだろう。しかし、その方々が立ち直るために、私たちには何ができるのか。私も祖父のように「一人の人として、普通に関わる」、そんな人になりたい。犯罪を犯そうと思っていなかった受刑者もいる。しかし、法の裁きを受け、前科者として生きていかねばならない。この時、普通に生きてくれる存在がいたらどうだろう。私だったら、少し前を向いて生きていけそうな気がする。犯罪を起こしてしまった人も自分と同じ人間である。その人にも、大切な過去、思想がある。なぜ罪を犯してしまったのか目を背けてはならない。過ちを犯した人とともに、犯罪の無い世界をつくっていききたい。



広島県保護司会連合会会長賞

「見かけで判断しない」

広島県・福山市立向丘中学校・2年
萩原 はぎわら 千寛 ちひろ

涼風が窓から吹きこんでくる。夏休みが近づき課題が配布された。その中に「社会を明るくする運動」と書かれた紙があり、ふと思った。社会を明るくする為にできる事って何だろう。疑問に思っただけで調べてみることにした。インターネットで検索してみると、ある記事が目に入ってきた。

タイトルには「受刑者が保護猫の世話をしながら更生を目指す」とあり、興味本位で読んでみた。それは受刑者一人に対して一匹の保護猫がペアとなって、責任感と愛情を持って世話をする更生プログラムだった。

私は最初、残酷な犯罪者なのだから、世話をしたら猫を傷つけてしまうのではないかと思った。しかし、映像に写っていた受刑者は脆いガラスに触れているのかと思うほど優しく猫に触れていた。私は感銘を受けた。更に受刑者達は猫を風呂に入れたり、刑務所内での労働で貯めたお金で猫の為におもちゃを買ったりしていた。なかには自ら編み物を習って猫の帽子を作る人もいた。猫の為に受刑者達の行動は慈愛に満ちたものだった。

また映像を見ていると、この更生プログラムは受刑者の更生だけを目的としたものではないと感じた。受刑者と繋がる保護猫も辛い過去を抱えている。飼い主から放棄され、人の愛情に触れたことが無い猫もいた。殺処分になるかもしれない保護猫達も受刑者の愛情に触れ、人と共に生きる喜びを感じているのだ。また受刑者にとって猫は、過去の罪や外見で判断しない存在であり、心を癒やし他者への思いやりの精神を教えてくれる大切な家族になっていたのだ。

映像の最後で一人の受刑者に話を聞いていた。彼は終身刑という生涯刑務所から出られない刑罰を受け、生きる意味を失っていたそうだ。だが彼にとって猫は暗闇を照らす太陽のような存在だと話していた。

このプログラムを知ったことで、私は、生まれながらの悪人はいないと感じた。過去に残虐な犯罪を起こしたとしても、心の底には皆同じ純粋な気持ちがあると考えることができた。受刑者と保護猫が繋がることで、互いの心の傷を癒やし愛情や思いやりを教えてくれる大切な存在を得ることができた。人間同士では難しかったかもしれない心を動かすきっかけを猫が作ってくれたのだ。動物との触れ合いが、受刑者の人間性を変えたというケースもあり、それほど互いの命を慈しむ体験と繋がりは偉大なものだった。私は、もう一度考えてみた。社会を明るくするためには何ができるのだろうか。それは「人柄を過去や外見で決めつけない」ことだと考える。過去に過ちがあったとしても、それだけで

人柄を決めつけるのでは無く、皆が心の中に持っている純粋さや思いやりの心が素直に出せるような社会を作ることが大切だと思う。動物との関わりの中で、受刑者の心に起こった変化は唯一無二のものだ。この素晴らしい変化を知って私は改めて、愛情や思いやりを与え合うことを人間同士で体験できる機会が、どの人にも約束される社会があれば良いと思う。偏見の無い動物と人間の姿から、犯罪が起きない明るい社会を作る、心の在り方を教えてもらったのかもしれない。

最後に、一人一人が過去の過ちや外見で相手の全てを判断せず思いやりの精神を大切に、日常の些細な喜びを共有し噛み締められるような社会にしていきたい。



広島県更生保護協会理事長賞

「もう一度歩き出すために」

広島県・如水館中学校・3年

つちや しんき
土屋 真輝

ある日、テレビで更生保護施設に暮らす人々を紹介する特集を見た。そこには、かつて罪を犯し、社会から距離を置かれざるを得なかった人たちが、もう一度真つ当な生活を取り戻そうと、日々努力する姿が映し出されていた。

私は、その画面から目を逸らすことができなかった。彼らの姿に「自分とは関係のない世界」として距離を置くことは、もはやできなかった。それまでの自分は、罪を犯した人に対して、どこかで「怖い人」「自業自得」といった冷たい印象を抱いていた。しかし、番組の中で語られた彼らの背景には、孤独や貧困、虐待、教育の機会を奪われた過去など、多くの事情があった。それは、決して犯罪を正当化する理由にはならないが、「人はなぜ道を踏み外すのか」という問いを私に突きつけた。そして同時に、「人はやり直すことができるのか」という問いも突きつけられた。「社会を明るくする運動」は、犯罪や非行の防止、そして過ちを犯した人の立ち直りを支えることを目的とした全国的な取り組みである。この運動は、私たち一人ひとりの意識と行動が、社会全体の空気を変えていく力を持っていることも明らかにする。犯罪や非行の原因は、単なる悪意や性格の問題にとどまらず、環境や人間関係、精神的苦痛など、さまざまな要因が重なって生まれるものだというのを、私は改めて実感した。過ちを犯した人を、「一度間違いをした人」として排除するのではなく、「もう一度歩み出そうとする人」として受け入れる社会。そうした価値観が広がることこそが、明

るい社会づくりの土台となるのではないのだろうか。実際に保護司や更生保護施設、地域のボランティアの人たちは、そうした立ち直りを支える存在として活動している。彼らは無償で、見返りを求めることなく、罪を犯した人に寄り添っている。その姿は、「人は、信用されることで、自分を信じ直す力を取り戻せるのだ」と私に教えてくれた。中学生の私には決して大きなことではない。しかし、「偏見を持たないこと」「過去ではなく、今の行動を見ること」「他人の失敗を笑わないこと」といった、小さな態度の積み重ねが、やがては社会の空気を変える大きな力になると信じている。学校でも、友人関係や部活動の中で、他者がつまずいたり、孤立したりする場面は少なくない。そうしたとき、声をかけ、寄り添うこともまた、「支える社会」の一つの形ではないだろうか。「社会を明るくする」という言葉は、特別な人だけが成し遂げられることではない。ひとりひとりが、他者の立ち直りや再出発を信じる姿勢を持ち、温かな眼差しを向けること。その積み重ねが、失敗を恐れずに生きられる、希望のある社会を育てていくのだと考える。私自身、これからどんな人生を歩んでいくのか、どんな壁にぶつかるのかも分からない。だが、もし私が間違いを犯したとき、やり直す機会を与えてくれる人が一人でもいたなら、どれだけ心強いのだろうか。だからこそ、私もまた、誰かの「もう一度歩き出した」という声に気づき、そっと手を差し伸べられる人間でありたい。



広島県更生保護女性連盟会長賞

「立ち直る勇氣」

広島県・尾道市立御調中学校・3年

とさ こうたろう
土佐 晃太郎

「社会を明るくする運動」。その言葉の中には人を思いやる優しさや、誰もがやり直せる社会への願いがこめられていると僕は思います。

僕たちが何かをする時、最初からすべてが上手くいくわけではありません。失敗したり間違った選択をしてしまったりはどんな人にも起こりうるのだと思います。そこで大切なのは、その後どうやって立ち直るか、そしてそれを見守り、支えようとする人がいるかどうかです。

過ちを犯した人に対して、「悪いことをしたのだから仕方ない」と突き放すのは簡単です。しかし、その人が「もう一度やり直したい」と本気で言うなら、それを否定せずに理

解や協力することが大切だと思います。

周りの人たちが立ち直りを目指す人に寄りそうこと。それだけで心の支えになると思います。信じてもらえるだけで、もう一度頑張ろうと勇気が湧いてくる人もいます。

僕は一年生の頃、テストでとても悪い点数をとってしまい落ち込んでいました。普段は怒らない父も珍しく僕を叱りました。しかしその後父は僕を見捨てることなく、どうすればいいかを一緒に考えてくれました。おそらく当時の僕は、叱られただけで終わっていたら何事にもやる気が出なかったと思うし、もっとダメな方へ進んでいたかもしれません。父からの励ましにとっても助けられました。

僕は、自分の周りの誰かが間違いをしてしまった時、その人を遠ざけるのではなく、真剣に関わり、「大丈夫、一緒に頑張ろう」と声をかけられる人になりたいと思っています。実際にはそんなに簡単なことではないし、怖い気持ちが出てしまうかもしれません。しかし、もしも自分が逆の立場だったらやっぱりもう一度信じてもらいたいし、前を向くための支えがほしいと思うはずです。父が僕にしてくれたように、温かい励ましで人の力になりたいと思います。

「社会を明るくする」というのは、特別な誰かが立派なことをするという意味ではありません。ちょっとした思いやりや、相手の気持ちを想像しようとする、そして、人の「これから」を大事にしようとする気持ち。こうした一人一人の行動が、周りの空気を変え、社会全体を明るくしていくのだと思います。

そのとき、今の自分に何が出来るのかを考えました。友達の話をしっかり聞く、困っている人に声をかける、SNSなどで人が傷つかない言葉を選ぶ、そういった小さな積み重ねが優しい社会に繋がっていくと信じています。人を信じる気持ちや立ち直りを応援する姿勢は僕たち中学生にもきっと持てるはずです。

だから、家庭や学校、地域など身近な場所でも、誰かが失敗したときにどう接するかはとても大切です。笑ったり無視したりするのではなく、「大丈夫」「また頑張ればいい」と言える雰囲気を作るだけで、その人は救われるかもしれません。社会全体がそうした空気を満たされれば、「またやり直せる」と信じられる人が増えると思います。

すぐに大きな変化がなくても、小さな一歩の積み重ねが未来を創ります。やり直せる勇気を持った人を、僕たちが応援できる社会でありたいと思います。そして、そんな温かい社会の中で、僕も誰かの力になりたいです。

優秀賞

広島県BBS連盟会長賞

「居場所を生むもの居場所が生むもの」

広島県・広島市立五日市観音中学校・2年

ひらおか ゆい
平岡 由為

誰かが一人で寂しいとき、自分には価値がないと思ってしまったとき、優しい言葉をかけられたらきっとその人の居場所はなくならないと思いました。私は優しい言葉をかけることが犯罪や非行を防ぐ鍵になると思い犯罪や非行について詳しく知るため、調べることにしました。

まず犯罪は簡単にいうと詐欺や窃盗、暴力などの法律違反のことです。そして非行とは未成年が法律に反する行動をとった時、例えば飲酒、喫煙、万引きのことを指すと知りました。私はなぜ犯罪や非行をする前に思いとどまることができないのか考え、さらに深く調べてみることにしました。

そしてその原因の一つだと思われるのが、家や学校での居場所がない孤立が原因なのではないかということです。例えば親からの虐待や、学校でのいじめなどで自分には価値がないと感じてしまい、自分の存在が否定されているように感じてしまうこともあると思います。居場所がなく、自分は孤独だと思ってしまい、そのような行動に走ってしまったのではないかと思います。行動に移す前に自分にとって大切な人がいたり大切に思われていたなら、その人を傷つけないよう犯罪や非行を思いとどめるのではないかと思います。だから私は孤立が大きな原因だと思いました。

そして私は犯罪、非行をした人たちの更生について元非行少年の話を見つけました。彼は少年院での経験を通じて「自分のことを大切に思ってくれる人がいるかどうか、立ち直れるかどうかの分かれ目だった。」と語っていました。親から虐待をうけて育っていた彼が、少年院で仲間や職員の人に大切にされたことが彼の今後の人生に影響を及ぼしていると思いました。私は、人は誰かに大切にされることで変わるのだとこの話を知った時強く感じました。そしてこの話をみつけて私は友達と話したことを思い出しました。

ある日友達が同級生の悪口を私に言ってきました。私はそのとき、その話に便乗せず、少し緊張しながらも友達に「でもあのひと話をするのって少し楽しいよね。」と言ってみました。すると友達は「確かに。」と言ってその子のいいところを話し出しました。私はその瞬間、その場の雰囲気が和

らぎ、温かい空気になっていくのを感じました。

この会話から私は、その人の悪口や陰口を言うのではなくその人のいいところに目を向け話すことが居場所を生む第一歩だと実感しました。私は人の居場所を失わせる言葉ではなく居場所を生む言葉、その人を大切にすることをかけるようにしたいと思いました。

そして今の時代だと他にも人の居場所を作るものがたくさんあります。そのうちの一つがSNSです。SNSは人と人がインターネット上で交流でき、自分の考えを気軽に発信できるようになっています。しかしそれを悪用すれば、相手のことを軽んじて誹謗中傷をし、人を孤立させる原因になりかねないと感じました。

私は人の心に居場所を作る言葉をかけたいです。そして誰かが孤独に苦しんでいる時、そっとその人に寄り添える存在でありたいです。SNSでも日常でも、私たちの一言が誰かの未来を変えるかもしれません。だからこそ、私はこれからも人を孤立させる言葉ではなく、人の居場所を作る、つながりを生む言葉をかけていこうと思います。そんな言葉が溢れる社会こそが犯罪や非行のない、明るい社会への第一歩になるのではないかと思います。



サンフレッチェ広島賞

「見えない傷に気づく社会へ」

広島県・東広島市立高屋中学校・3年

東郷 恵那

「非行」と聞くと、万引きや暴力などのはっきりとした問題行動を思い浮かべる人が多いかもしれません。けれど、私はいじめも非行の一つだと考えています。特にSNSでのいじめは、互いの顔が見えない分、相手の心に深い傷を残しやすいのではないのでしょうか。ですから、社会を明るくする運動が目指す「犯罪や非行の防止」のためには、いじめへの理解も欠かせないと思います。

私は中学生になってから、SNSの怖さや、人の言葉の重さを感じる機会が多くなりました。表面上は笑顔で話しているのに、裏では平気で人を傷つけるようなことを言う人がいます。私もその「裏」を目の当たりにし、傷ついたことがあります。

ある日、友達が申し訳なさそうに「ちょっと言いづらいんだけど…」と私に話しかけてきました。その友達がスマホのスクリーンショットを見せながら「男子のグループで『あいつの顔変じゃね?』って言ってたよ。」と言ったとき、私は頭が真っ

白になりました。私の容姿について悪口を言っていた中の一人は、学校では友人として普通に話す相手だったからです。でも私は、「あー、そうなんだ。別に気にしてないよ。」と笑って答えました。本当はショックだったのに、傷ついたとは思われなくなかったからです。弱みを人に見せるのが怖くて、「どうでもいいふり」をしました。けれど、あふれそうな程涙が溜まり視界がぼやけるくらい、本当はつらい気持ちでいっぱいでした。「私は変なの?」「今までもずっとそう思われていたんだ。」と、何度も言葉が頭の中をぐるぐると回りました。学校では普通に話していたのに、裏ではそんなふうに思われていたのかと考えると、信じていた気持ちを裏切られたように感じました。

SNSは便利ですが、顔が見えない分、軽い気持ちで誰かを傷つけてしまうことがあります。冗談のつもりでも、言われた側の心には深い傷が残ります。私はたった一言の言葉で、学校に行くことがつらくなりました。

私はその時から、「見えないところで苦しんでいる人が他にもいるのではないか」と考えるようになりました。学校では元気そうに振舞っていても、心の中では誰にも言えない悲しみや不安を抱えている人がいるかもしれない。私のように強がって「どうでもいい」と言っている人も、本当は助けてほしいと思っている人がいるかもしれない。そう思うと、小さな変化に気づくことの大切さを強く感じました。

「社会を明るくする運動」は、罪を犯した人や非行にはしった人の立ち直りを支え、犯罪や非行のない社会を目指す運動です。けれど私は、「誰かが傷つく前に周りが気づける社会」をつくることも、この運動の一部だと考えます。犯罪や非行は突然起こるものではありません。小さな無視や悪口、心無い言葉の積み重ねが、やがて心の余裕をなくし、間違った方向に進んでしまうきっかけになることもあるからです。

私は今、あの時言葉をかけてくれた友達に心から感謝しています。言いづらいことを伝えるのは、とても勇気がいるはずですが。その友達が教えてくれたからこそ、私は自分がつらいと感じている気持ちに向き合うことができました。何も知らずに気づかぬふりをして過ごしていたら、知らないうちに心がすり減っていたかもしれません。

これからは、だれかが悪口を言われていたりからかわれていたりしたときには、「それはちょっと違うと思う」と自分の意見を言える人になりたいです。SNSで誰かのことを悪く言っている投稿を見かけたときには、スルーせずに「それ、見ていて良い気持ちしないよ」と言いたい。もし直接言えな

くても、傷ついてしまった人に「大丈夫?」と声をかけるだけでも、少しは救いや力になると思います。

大人たちには、私たち中学生がSNSの中でどんな悩みを抱えているのかを知ってほしいです。教室の中では笑っていても、家や心の中では泣いている人がいる。誰にも見えない場所で、深く傷ついている人がいる。同世代の人たちには、スマホの向こうに心を持った人がいるということを忘れないでほしい。言葉は特に、人を救う力も、人を追い詰める力も持っていることをもっと広く知ってもらいたいです。私たちにできることは小さなことかもしれませんが、でもその小さな優しさや気づきが誰かの心を守り、社会を明るくしていく一步になると思います。私も、もう「どうでもいいふり」をして自分の気持ちをごまかすのではなく、正直な気持ちに向き合って、人にも優しくできる人でありたいです。

見えない傷に気づき支えあえる社会を作るために、私はこれからも身近なところから自分にできることを続けていきたいです。

特別賞 サンフレッチェ広島レジーナ賞

「思いやりで作る明るい社会」

広島県・安芸高田市立吉田中学校・3年

うえき りお
植木 莉桜

私たちが安心して暮らすためには、犯罪や非行のない社会を作ることが大切です。そのために行われているのが、「社会を明るくする運動」です。私は学校や家庭での体験を通して、この運動について考えるようになりました。

私はあるとき、ニュースで少年による事件が報じられているのを見ました。まだ若い人がそのようなことをしてしまったと知って、とても悲しい気持ちになりました。けれども、同時に「どうしてそうなってしまったのだろう」とも考えました。きっと、まわりの人との関わりや、家庭での環境、心のよりどころが足りなかったのかもしれません。人は誰でも、支えてくれる人がいないと、間違った道に進んでしまうことがあるのだと思いました。

学校生活の中でも、小さいいさかいやケンカが起きることがあります。私も友達と意見が合わず、きつい言い方をしてしまったことがあります。相手を傷つけてしまったときは、あとでとても後悔しました。相手に謝り、仲直りできたことで安心しました。小さなことでも、人を思いやる心がなければ、トラブ

ルは大きくなるのだと実感しました。だから、日ごろから「相手の立場を考えること」がとても大切だと思います。

また、私の家の近くでは地域の人たちが交代で見回りをしています。夜になると「こんばんは」と声をかけながら歩いている姿を見て、地域全体で子どもたちを守ってくれているのだと感じました。犯罪を防ぐには、警察や家族だけでなく、地域の人が協力することも大事なのだと思いました。こうした活動のおかげで、私たちは安心して生活できているのだと思います。

犯罪や非行をなくすことは大切ですが、すでに罪を犯してしまった人が立ち直ることも同じくらい大切です。人は誰でも失敗することがあります。その失敗をきっかけに人生をあきらめてしまうのではなく、もう一度やり直すことができる社会であってほしいと思います。

たとえば学校では、ルールをやぶった生徒にただ注意するだけでなく、「なぜそうしたのか」を聞いたり、「どうすればよかったのか」を一緒に考えたりすることがあります。そのように相手の気持ちを理解し、正しい方向に導いてあげることが、立ち直りにつながるのだと感じます。

私は将来、大人になったとき、地域や周りの人のために少しでも役に立てる人になりたいです。そのために今できることは、身近な友達や家族を大切にし、人を思いやる心を持続することだと思います。もし困っている人や失敗してしまった人がいたら、冷たくするのではなく、少しでも支えてあげられるようにしたいです。

「社会を明るくする運動」は、特別な人がするのではなく、一人ひとりができることから始まるのだと思います。あいさつをすること、ありがたうを伝えること、困っている人に声をかけること。そのような小さな行動の積み重ねが、犯罪や非行のない明るい社会につながるのではないのでしょうか。

私はこの作文を書きながら、改めて自分もその一員であることを強く感じました。これからも周りの人を思いやり、みんなが安心して暮らせる社会を作るためにできることを考えていきたいです。



“社会を明るくする運動”作文コンテスト 入賞者

小学生の部



“社会を明るくする運動”
広島県推進委員会委員長賞

福山市立伊勢丘小学校5年 はた 秦 みおり 美織
「知ることから始めよう」



広島保護観察所長賞

広島市立五日市東小学校6年 よこはた 横畑 りこ 莉子
「寄り添える仲間」



広島県保護司会連合会会長賞

東広島市立西条小学校6年 うじま 氏間 そうた 創太
「はじめの一步」



広島県更生保護協会理事長賞

三原市立久井小学校6年 どい 土居 はる 蓮琉
「心をつなぐ「あいさつ」の力」



広島県更生保護女性連盟会長賞

広島市立中山小学校6年 ひきたに 引谷 はるひさ 悠久
「まずは小さなことから」



広島県BBS連盟会長賞

広島市立五日市南小学校6年 さかい 坂井 ひなこ 日向子
「プラスの言葉は魔法の言葉」



サンフレッチェ広島賞

東広島市立八本松小学校6年 きむら 木村 あさき 旭希
「暴力のない明るい社会にするためには」



サンフレッチェ広島レジーナ賞

広島市立竹屋小学校6年 わたなべ 渡邊 そうすけ 蒼介
「たった一言で」

小学生の部

竹原市立大乘小学校6年 こだま 児玉 はのん 羽杏
「声かけで笑顔な社会に」
尾道市立瀬戸田小学校6年 わたなべ 渡邊 のどか 和花
「地域の人との交流」
広島市立みどり坂小学校6年 つりゅう 鉤流 ゆいな 結菜
「話すことの大切さ」

中学生の部



“社会を明るくする運動”
広島県推進委員会委員長賞

広島市立幟町中学校3年 り 李 えいなり 瑛慈
「やり直す勇気を支える社会へ」



広島保護観察所長賞
日本更生保護女性連盟理事長賞

福山市立加茂中学校2年 ふじま 藤間 しほ 志帆
「立ち直り、その未来のために」



広島県保護司会連合会会長賞

福山市立向丘中学校2年 はぎわら 萩原 ちひろ 千寛
「見かけで判断しない」



広島県更生保護協会理事長賞

如水館中学校3年 つちや 土屋 しんき 真輝
「もう一度歩き出すために」



広島県更生保護女性連盟会長賞

尾道市立御調中学校3年 とさ 土佐 こうたろう 晃太郎
「立ち直る勇気」



広島県BBS連盟会長賞

広島市立五日市観音中学校2年 ひらおか 平岡 ゆい 由為
「居場所を生むもの居場所が生むもの」



サンフレッチェ広島賞

東広島市立高屋中学校3年 とうごう 東郷 えな 恵那
「見えない傷に気づく社会へ」



サンフレッチェ広島レジーナ賞

安芸高田市立吉田中学校3年 うえき 植木 りお 莉桜
「思いやりで作る明るい社会」

中学生の部

江田島市立江田島中学校2年 こだま 小玉 はるいち 春彦
「自分の役割」
広島市立中広中学校2年 かねこ 金子 あやな 絢南
「だれも、ひとりじゃない」
広島市立中広中学校2年 やまぐち 山口 こなつ 小夏
「心のピースをはめる」

“社会を明るくする運動” 標語コンテスト入賞作品

広島県保護司会連合会会長賞

大丈夫
その一言が
道照らす

尾道市立栗原中学校1年
松尾 杏

広島保護観察所長賞

やり直す
勇気をくれた
君の声

広島市立江波中学校2年
花中 柚月

社会を明るくする運動 広島県推進委員会委員長賞

支える手
寄り添う心
あなたから

広島市立古田中学校2年
段ノ上 煌央

広島県更生保護女性連盟会長賞

ひとりじゃない
心にそつと
寄り添おう

広島市立牛田中学校1年
望月 木陽

広島県更生保護協会理事長賞

人と人
優しさ重ねて
生きていく

尾道市立日比崎中学校1年
安倍 知希

“社会を明るくする運動” 標語コンテスト入賞作品

広島県BBS連盟会長賞

見つめよう
変わらぬ過去より
変わる未来を

江田島市立江田島中学校2年 松下 優愛

サンフレッチェ広島賞

ため息を
ひとつ拾えば
笑顔咲く

広島市立瀬野川東中学校3年 増谷 歩子

サンフレッチェ広島レジーナ賞

困りびと
助けるその手は
自分から

東広島市立向陽中学校3年 石川 慈英

“社会を明るくする運動”標語コンテスト 入選者

安芸太田町立安芸太田中学校2年	庭田 星彩	「一人では 作り出せない その笑顔」
広島市立祇園東中学校1年	前田 心幸	「私たち やりなおしたい 君を待つ」
広島市立江波中学校2年	天野 莉乃	「見ているよ あなたの頑張り とどいてる」

“社会を明るくする運動”とは

“社会を明るくする運動”は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と、罪を犯した人たちや非行をした少年たちの立ち直りについて理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない地域社会を築こうとする全国的な運動です。“社会を明るくする運動”は昭和26年に始まり、今回で第75回を迎えます。“社会を明るくする運動”作文・標語コンテストは、次代を担う広島県の小学生及び中学生の皆さんに、日常の家庭生活、学校生活の中で体験したことを基に、犯罪や非行をした人の立ち直りについて考えたことを作文や標語にすることで、本運動に対する理解を深めてもらうことを目的としています。

今回は広島県内の児童、生徒から作文合計22,438作品、標語合計11,317作品の応募をいただきました。



共同募金に協力しましょう

本資料は、共同募金配分金により作成